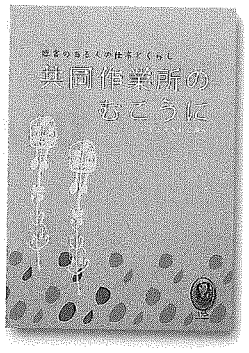
共同作業所のむこうに

障害のある人の仕事と暮らし

きょうされん　編

2012年9月28日発行　創風社　A5判248頁
本体1,800＋税　ISBN978-4-88352-191-3



評・野中　猛（日本福祉大学研究フェロー）

きょうされん結成35周年を記念して出版された本である．改めて共同作業所運動の確かな一歩を記している．

障害者自立支援法違憲訴訟で原告の1人となった秋保喜美子さんの文を中心に企画していた途中，東日本大震災が起こった．急きょ本書では2つのプロローグが並んだ．本文では，1つ1つの作業所における1人1人の営みを大切に記している．

災害と障害者の関係を冷徹に表しているのは，例えば宮城県のデータである．「総人口に占める死亡者の割合が0.8％であるのに対して，障害のある人のそれが3.5％」と紹介されている．もっと小さな場面でも，おそらくさまざまな差別があったことであろう．逆に，見事な災害対応で障害のある人の被害を最低限に抑えた情報も耳にする．こうした生の経験を武骨に活かすのも共同作業所運動の精神であろう．

35歳以下の若い人は，共同作業所運動が始まった頃を知らないことになる．なぜ共同作業所が作られたのか，それが全国で増えて，なかなか法内施設にならなかったのはなぜか，赤松英知さんや藤井克徳さんの解説も貴重である．今活躍している法人の多くは，前身が共同作業所であった事実を思い出したい．

しかし，以前に比べると，ずいぶんおしゃれな雰囲気になったものである．写真に映る表情も明るいし，文章表現も軽くなった．表通りの光の中で多様な活動に取り組んでいる．これから先，40周年，50周年と，もっともっと普通の表現になるのだろうと想像したりする．

「あたり前の生活」，「障害があることの辛さを感じなくてすむ社会」，「自分たちのことを自分たち抜きに決められてしまわない権利」はまだまだ十分に実現していない．しかし，方向を見失うことなく，地道な活動を積み重ねている実践は，1つ1つが感動的である．